

第100回 イギリスのインド支配

イギリス東インド会社によるインド征服

ちょうどムガル帝国が衰退していくのと入れ替わるようにして、イギリスがインドに登場します。**イギリスは17世紀以降、マドラス、ボンベイ、カルカッタに商館を建設**し、ここを拠点として貿易を本格化させます。商館とっていますが、**実際には要塞のようなもの**で、商売をするだけでなく、地元の権力者との交渉や戦いによって土地も獲得していきました。

フランスも、17世紀後半には、同様に商館を建設しました。フランスが拠点にしたのはシャンデルナゴルとポンディシェリで、シャンデルナゴルはベンガル地方にあってカルカッタに近い。ポンディシェリも南インドでマドラスに比較的近い。当然、イギリスとフランスは競合することになります。

一時は、フランスがイギリスを圧倒した時期もあったのですが、18世紀の半ばに南インドでイギリスとフランスが戦ったカーナティック戦争で、イギリスが勝利してからは、南インドでフランス勢力は衰退します。

そして、ベンガル地方でイギリスとフランスが戦ったのが、有名な1757年のプラッシーの戦いです。イギリス軍の兵力は約3000。ただし、このうちイギリス兵は950名ほどです。あとの2000名は何か。イギリスが現地で雇った傭兵。インド人の兵士です。対するフランス軍はというと、フランス兵はわずか50名。しかし、フランスは現地の支配者であるベンガル太守と同盟を結んでおり、このベンガル太守軍の兵力約6800。イギリス対フランスの戦争といいながら、戦いの中心となっているのはインド人同士というところが特徴的です。また、イギリス兵とフランス兵の少なさは、意外ですね。私たちは英仏はものすごく強く、何でも思うがままにできたというイメージを持ちがちですが、ヨーロッパからインドまで兵士を派遣するのは、イギリスもフランスも大変な負担だったのです。

話を戦いに戻すと、イギリス側3000、フランス側6800ですから、フランス側が圧倒的に有利です。ところが、この戦いでイギリスが勝利します。その立役者として活躍したのが、イギリス東インド会社のクライブです。説明が遅れましたが、イギリスの活動主体はイギリス政府ではなくて、イギリス東インド会社です。イギリス、イギリスと言っていますが、イギリス政府が指揮しているのではない。実体はイギリス東インド会社ですから、注意してください。で、そのクライブは、ベンガル太守軍の将軍に買収工作をした。太守を裏切り、イギリス側に寝返ったら、戦後、ベンガル太守の地位につけると約束をしたのです。将軍は買収に応じました。戦いが始まると、この将軍、ベンガル太守の命令を無視し、軍を動かさない。結局この裏切りの結果、イギリスが勝利することになったのです。この買収工作で、クライブは、イギリス本国で一躍英雄となりました。

この戦闘が、結果としてインドの運命を変えることになりました。イギリス東インド会社は、この後フランス勢力をインドから一掃しただけではなく、新しいベンガル太守を傀儡（かいらい）としました。**1765年には、イギリス東インド会社はベンガル地方の徴税権を獲得**しました。**貿易会社が、他国の一地方の税金を徴収**するのです。もう、**貿易会社と言うより、統治機関**と言っていいでしょう。事実上、ベンガル地方を支配するようになったということです。ベンガル地方というのは、現在のバングラデシュです。

これ以後、インドはイギリス産業の原料供給地兼製品市場とされていきました。

イギリス東インド会社はインドから木綿を買い付け、イギリス本国に輸出します。折からの産業革命で、発展しつつある綿織物工業の原材料です。そして、**イギリスの機械制大工場で生産された綿織物が、今度はインドに輸出**されます。**インドは世界有数の綿織物生産国でしたが、手工業**だったので、イギリスから輸出される大量生産で安価な綿織物に対抗できません。この結果、**インドの綿織物工業は大打撃**を受けました。**「世界に冠たる織物の町」といわれたダッカの人口は、わずかのうちに15万から3万に激減**しました。インド総督ベンティン

は、1834年にイギリス本国に送った年次報告に「世界経済史上、このような惨状に比すべきものはほとんど見いだせない。**職工たちの骨がインドの平原を白色に化している**」と書いたほどです。

お金とモノの流れを単純に考えてみると、**イギリス東インド会社は徴税権を持ち、インド人から税金をとる。その税金で、インド農民から原綿を買い付けると考えれば、ただで原料を手に入れている、もしくは奪っているのと同じことです。それを加工した製品をインド人に売る**ということは、つまり、奪った原料で作った製品を、奪った相手に売りつけているわけで、**富は一方的にイギリスに流れる**こととなります。イギリス側にとって、これほど儲かる商売はないし、**インド側からみれば、最大限搾り取られている**わけです。

このあと、イギリスは、インド各地の地方政権を次々に支配下に置いていきます。インド征服のための大きな戦争としては、南インドのマイソール王国とのマイソール戦争（1767～99）、マラータ同盟とのマラータ戦争（1775～1818）、シク教国とのシク戦争(1845～49)があります。

シク戦争の勝利で、イギリスによるインド征服は事実上完了しました。

イギリス東インド会社によるインド支配

イギリス東インド会社が、インドを支配するようになって、インドは重い負担に苦しむようになりました。

まず、税負担があります。イギリス東インド会社の徴税額をみると（プリントの表を参照しながら）、1765年ベンガル太守時代には、82万ポンド。1770年東インド会社時代になると234万ポンド。1790年には340万ポンドと、増加しつづけています。別の資料によると、東インド会社による地租（土地税）収奪は、1771年から72年にかけて234.2万ポンド。これを指数100とすると、1821年から22年が1372.9万ポンドで、指数589。1856年から57年が1531.8万ポンドで指数654。こちらでも、どんどん税額が増えている。

税を増やすだけでなく、**東インド会社は、インド農民に高く売れる商品作物の栽培を強制**します。綿布の染料に使う藍や、麻葉アヘンの原料となるケシなどです。小麦など食糧をつくるべき畑で、食糧を作れない。食糧生産量は落ちる。藍やケシをいくら栽培しても、腹の足しにはならない。この結果、飢饉が激増します。

インド大飢饉回数の表があります。

18世紀 大飢饉3回 死者数不明

1800～25 大飢饉5回 死者100万人

1826～50 大飢饉2回 死者40万人

1851～75 大飢饉6回 死者500万人

1876～1900 大飢饉18回 死者1600万人

19世紀に2000万人以上が餓死しているのです。イギリスの支配によって、インドは貧困に追い込まれたのです。

（『[世界史講義録](#)』）